

# 『日本の伝統・文化』

## 伝統工芸Ⅰ、Ⅱ 授業実践

都立若葉総合高等学校 教諭 宮 崎

### 1 はじめに

赴任当初の頃について

本校の場合、総合選択科目の中に、四つの系列（人間探究系列、芸術表現系列、伝統継承系列、情報交流系列）がある。この「伝統工芸」の授業は芸術表現系列ではなく、伝統継承系列の中にあり、受講している生徒も多様で1年の芸術選択科目が音楽や書道の生徒もいる。美大進学を考えている生徒は同時展開の「素描」を受講しているので、この授業にはそういう生徒はほとんどいない。授業は3講座あり「伝統工芸Ⅰ」総合選択1クラス（10名）、自由選択1クラス（20名）、「伝統工芸Ⅱ」総合選択1クラス（10名）を設定している。

普通科高校から総合高校に赴任する教員のほとんどが経験することとして、実際に赴任してから、「総合高校とは何か」を理解していく。そしてこの『日本の伝統・文化』についても同じことが言えた。生徒の実態や認識、作業力等を見ながら「日本の伝統・文化の授業とはなにか」が少しずつ見え始めた。

自分にとって大きい問題は「陶芸」を授業という形で受け持つのは初めてだということだった。赴任する以前には特別支援学校で職業訓練としての陶芸を指導したり、普通科高校において部活動の中で一定期間陶芸指導を行ったりと、このような陶芸指導の経験はあったが、実際、授業となると随分勝手が違ってくる。様々な問題があり工夫しながら解決し授業をすすめていかなければならない。具体的には時間の問題で授業時間という定められた2時間の枠に陶芸の作業が収まらないことだ。また陶芸自体が毎日のように鍛錬を必

要とする性質のものであり、1週間に1回の授業で何ができるのか想像ができなかった。また、1回の授業を行うのに準備やその他の作業が非常に多く、授業時間外の時間をかなりそれらに取られ負担も大きい。実際休日も学校に出ることが多かった。また、受け持つ授業の種類も陶芸だけでなく、本校独自の「マイプロジェクトⅠ」、「必修選択美術Ⅰ」をはじめ、7種類の授業を持つことになり赴任して早々、明日から始まろうとしている授業を前に本当に頭を抱えたものだった。このような状況から「伝統工芸」が始まっていった。

### 2 1年半の授業の様子

とにかく、この1年半は試行錯誤の日々であった。2コマの授業の時間に合わせて内容をどう組み立てていくか、時間からはみ出す部分はどう解決するかなどさまざま問題があった。たとえば、粘土は生もので乾かないうちに削り等の作業を終わらせなければならなかったり、絵付けと釉薬掛けでは20人のクラスは釉薬掛けが授業時間内で終わらなかつたりする。次週に作業を回すわけにはいかないので昼休みにそのまま延長したり、放課後に残って作業の続きを行ったりした。陶芸の授業はこういうものだからと生徒に理解してもらうしかなかった。やはり物理的に授業時間に押し込むのは無理がある。このような問題はあるが、生徒は文句の一つも言わずよく動いてくれた。

もう一つ苦労したのは、生徒が和食器のイメージを持たないということである。日常生活の中で、洋食器の方が一般的のようだ。生徒に聞くと7割は洋食器での食事が多いと答えた。また和食の場合、飯碗は左に置くことを知っていた生徒は4割しかいなかった。このような実態で教師と生徒の間にやきもののイメージにかなりの差があり、ここを埋めることを工夫して授業を作っていかなければならなかった。

## 授業の一例

やきものを知らない生徒がほとんどのなかで、陶芸に興味を持ってもらうのが先決である。最初の課題にインパクトのあるものを持ってこなければならなかった。その教材として選んだのが漫画の「美味しんぼ」のモデル北大路魯山人だった。鑑賞から授業を始めた。強烈な魯山人の人生は彼らに「カッコいい」と反応させ、独学で40歳から始めたといわれる作品は彼らに恐れ多くも「作ってみたい」と言わせた。導入には印象の強い最適の教材だった。それから、今度は魯山人の本物の作品を見に行こうと生徒に声かけと美術館にも出かけるなど次々に発展していった。このように生徒の反応や、また制作においては作業の様子などが授業作りのヒントになる。

ところで「北大路魯山人」のひとつの例で、いろいろな要素から日本の伝統文化が見えてきた。「書」「懐石料理」「和食器の種類」「日本の伝統文様」「日本各地のやきものの産地」「日本の歴史」「陶芸の技法」「復刻(写し)」「伝統の保存」切りがなくその要素は見つけられる。それをヒントに次のような授業におけるアプローチを考えてみた。

## 陶芸における伝統文化へのアプローチ

### (1) 日本の伝統文様(文様への意識)

生徒が器に絵付けを行なう時、漫画やイラスト等を描こうとした。生徒に和食器のイメージがないことがわかり、授業の中に日本の伝統文様を取り入れた。日本の意匠の特徴は完成され淘汰されたものは時代を越えて「写し」という形で受け継がれていく。「亀甲」「松竹梅」「青海波」「網目」「麻の葉」など文様には長寿や幸運などの吉祥を意味するものが多い。日本の伝統文化の原点は人の幸せを願う心であるように思う。

### (2) 人を思う器の形(形への意識)

1年選択美術でドイツのバウハウスの授

業で手に馴染む形の追究という木工を行なった。我々が使う道具はその手の機能のことを考えて作られているかどうかという意識を持つ授業であるが、その授業がここで生きる。

陶芸の形でも同じことが言える。本当に持ち心地の良い形かどうか。そのことを考えて使う人の身になって作る。西洋の器は手に持たないが日本の器は手に持って食べる。だから手のことをよく考えて作られた形であると言われる。特に抹茶碗は歪みがある。それは美の追究と使い手に優しく手に馴染むように作ってあると言われる。

### (3) 日本の食事(食への意識)

魯山人の作品を見て、日常の和食器を作ってみた。日本には、いかに豊富な種類の食器があるかがわかる。飯碗、汁碗、向付け、八寸皿、俎板皿、湯呑み、おちょこ、徳利、その他。その分だけ日本料理の種類も多い。また、器の並べかたも知ることができる。そして実際に料理を盛ってみたくなる。自作の抹茶碗でのお茶会、昼休みに汁碗での豚汁大会を行なった。不思議と料理を盛ると器がいきいきとして別物になる。器で食べてみての感想もワークシートに記録し、次回の制作にその反省を生かすようにする。



生徒作品



豚汁を汁碗によそう



生徒作品  
「小食の人のためのお膳」



生徒作品  
「父の日のお膳」

#### (4) 日本各地のやきもの産地

##### (日本の地理の意識)

日本ほどたくさんのやきものの産地を持つ国はほかに無いと言われる。その土地の粘土や技法が違う。そして世襲制が多く脈脈と受け継がれている。唐津焼（佐賀）有田焼（佐賀）益子焼（栃木）萩焼（山口）京焼（京都）備前焼（岡山）九谷焼（石川）産地を勉強することで日本の地理の意識もできる。

#### (5) 陶器の歴史（歴史への意識）

鑑賞においてよく桃山時代、江戸時代など時代名が出る。また、歴史上の人物の名前なども出てくる場合が多い。歴史への造詣も深めておきたい。

#### (6) 伝統技法を活かした制作

##### (伝統技術の知識と習得への意識)

授業の多くは陶芸制作である。日本の伝統技法を学び、制作していく。伝統的な技法を現代の作品に生かすことができる。美術部の生徒がこの方法で約1m×0.7m心の表現のオブジェを作り、昨年度東京都高等学校総合文化祭の中央展のコンクールに出品し、東京都教育委員会賞を受賞。



題名

「繋がれた想いのかけら」

すべて伝統技法の板作りで制作した。

#### (7) 美術館訪問（日本の文化財への意識）

良いものを作るには名品を見て、目を肥やす必要がある。去年は日本民藝館、夏休みには、東京国立博物館、国立西洋美術館に訪れた。また、秋には国立近代美術館工芸館では「タッチアンドトーク」という企画に参加し、実際に本物の美術館所蔵の工芸品を手に触れさせてもらい良い体験になった。



国立近代美術館工芸館「タッチ&トーク」



名品の茶碗は重いか軽いかな？

#### (8) 素材粘土を大事に思う

##### (環境への意識)

粘土も限りある材料である。益子の陶芸家濱田晋作氏がテレビで「粘土もあと何年もつだろうか。よそから持ってくる日はそう遠くはない。」といわれていた。石油と同じである。貴重な粘土で心を込めて丁寧に作る。

赴任してすぐにとりあえずということで生徒に湯呑みを作らせたがあまり出来が良くなかった。教師のとりにあらず作らせるという軽い気持ちが悪くなかったと思う。出来上がる

と持って帰ろうとしない。生徒はいらぬという。そうなるただの燃えないごみになってしまう。本焼きで焼いてしまうと土には戻らない。人間よりも長生きをしてしまう。責任をもって作ることを伝える。

### (9) 危機的状況の文化について知る。

#### (文化保存への意識)

伝統文化は危機的状況にあるとよく言われる。そのような中、伝統文化を救った人々がいる。彼らはどうやって救ったのかを知る。日本、更に韓国、沖縄の民芸を救った民藝運動の柳宗悦。さらに、同じ仲間の濱田庄司、バーナード・リーチなど。また、平良敏子、与那嶺貞など始め沖縄の布の復興に賭けた沖縄の人々のエネルギーにも感動がある。小さなことでもなにか自分にできることはないかを考えてみてもいい。

### 3 最後に

生徒がおかれている今の環境は、ちょうど日本文化が育まれた絶頂期の時代と比べると、対極にあるように感じる。この夏に教員免許状更新の講習で日本伝統文化振興会の「日本の伝統芸能」を受講した。そこで雅楽、歌舞伎、寄席、長唄などを学び、それらの分野に共通点があるのに気付いた。それはどの分野も人と人が対面して伝承されるものだという事である。長唄には西洋音楽のように楽譜がなかった。これでは後世の人たちに伝えられないということで譜面のようなものを作ったが、やはり微妙なニュアンスは譜面では伝えられないと言う。伝統文化の真ん中には「人」が存在する。人が豊かな心を持ち幸せに暮らすことを願うのが日本文化の原点であるように思う。

日本の伝統文化とはあまりにも奥が深く語りきれぬものではない。しかし、一教員として、一伝統文化の愛好家としても今ここからこの日本の文化の未来を背負っていく若

者につたなくはあるけどもこの素晴らしさを伝えておかなければと思う。日本は文化の宝の国、世界的にも類を見ない完成された文化を持つ国である。過去に文化をないがしろにした国は滅んできたと言う。これから日本がどのような方向に進むのか不安である。なんとか残していきたい。いったん失われたものを取り戻すのは不可能に近いものがある。そんな思いを抱いている。陶芸という一つの視点から日本の伝統文化を探り整理して、生徒に示していったらと思う。正直、まだ2年半しかやっていない陶芸の授業で、このような文章を書くには躊躇するものがあった。できれば、何年も先にこのようなことをすれば良かったと後悔する。授業もこれから検討し変えていく予定である。あくまでもこれはほんの走りはじめのこととしてご理解いただければと思う。



生徒作品



自作の抹茶碗でお茶会